

「大競争」時代の＜市場と権力＞(1)

## B. アンダーソンのナショナリズム論再考 (下)

原 田 太津男

(国際関係学科 講師)

### I. アンダーソンのナショナリズム論の構成

E. B. ハースが『想像の共同体』のクロスレビューで語ったように、『「想像の共同体」は何らかの理論を提示しようとしたものではない。それは体系的というよりむしろ喚起的(*evocative*)である』(Haas 1986: 719)<sup>(1)</sup>。たしかに、その意味でアンダーソンのナショナリズム論の全体的構成を素描するのは容易ではない(そうすると、たいていの場合、かれの議論の細部に宿るユニークさが失われる、という面も含めて)。しかし、以下では特徴的な用語法を中心に提起し、本稿の論旨に即するかたちで思い切った整理を試みたい。

#### 1. 宗教との親和性：死・宿命・戦争

この論点の意義については、すでに前稿で取り上げたとおりであるが、ここでは、アンダーソンが『想像の共同体』を執筆するに至った経緯から確認しておきたい。初期のインドネシア研究を含む、アンダーソンの論集『言語と権力』(*Language and Power*, 1991)の序章では、興味深い自伝的研究回顧が行われている。これに依拠して議論を始めよう。

大英帝国海軍の税関職員を父にもったアンダーソンは、アイルランドに育ち、20歳で渡米した。アメリカ有数のインドネシア研究センターであったコーネル大学入学後、アンダーソンは、中国が門戸を閉ざしていた事情もあって、同じくアメリカにとって政治的な関係が深いアジアの国、インドネシアに惹かれていく。スカルノ時代の末期にインドネシアで現地研究を始めたアンダーソンは、1965年9月30日のクーデター未遂事件(いわゆる

る9.30事件)以降、自分が「知り、愛したインドネシアは永遠に失われたという思い」にとりつかれる。アンダーソンは、スカルノのインドネシアやベトナムの反植民地独立闘争に深い感銘を受け、そのナショナリズムにも共感を覚えていた。

9.30事件にかんする批判的論考のために、結局、インドネシアに入国できなくなったアンダーソンは、転機を迎える。まずは、1970年代半ばのタイ(アンダーソンは「シャム」と呼ぶ)研究への転身である。「追放の好結果」として、アンダーソンは、比較法的な研究の枠組みを採用し、文学作品に真剣な取り組み始めた。特に研究枠組みの転換は、弟のペリー・アンダーソンをへてイギリス・マルキストとの急接近をもたらす。これが1982-3年に『想像の共同体』執筆に取りかかる直接のきっかけとなった(Anderson 1990, 邦訳3-20頁)。

そういうわけで、『想像の共同体』は、中国、ベトナム、カンボジアという社会主義諸国の戦争の世界史的意義を指摘し、革命国家とナショナリズムの関係へと筆を進めていくところから始まる。ナショナリズムを変則扱ったマルクス主義理論と自由主義理論双方の破産が宣告される。「かくも長きにわたって予言されてきたあの『ナショナリズムの時代の終焉』は地平の彼方にすら現れてはいない。実際、国民を形成するということは、我々の時代の政治生活におけるもっとも普遍的で正統的な価値となっている」(Anderson 1991, 邦訳20頁)。

さて、ここから派生する論点でアンダーソンの議論に補足すべき点があるとすれば、宗教との類似性にかんしてであろう。アンダーソンによると、18世紀は宗教的思考様式の黄昏であるとともに、ナショナリズムの夜明けでもあった。この啓蒙主義の時代は、信仰の衰退から「救済の不条理」という一種の精神的空白期を生み出した。この「近代独特の暗黒」を埋め合わせたのがほかならぬナショナリズムであった。ナショナリズムは、運命性を連続性に、偶然を宿命に転換する機能を果たすことで、この不条理を

解消することに成功していく。この宗教の機能を代補したナショナリズムは、戦場＝死地への動員力を備え、それが崇高な行為だと説明する能力をもつことになる（同上、34-5頁）<sup>(2)</sup>。

このようにして、ナショナリズムを自覚的な政治イデオロギーとみなさず、ナショナリズムをそれに先行する大規模な文化システム（宗教共同体と王国）と対比する必要がある、というのがアンダーソンの傑出した問題設定の一つであった<sup>(3)</sup>。

中世後期以降、非ヨーロッパ世界探査の影響とならんで、俗語出版の拡大によるラテン語などの聖なる言語の格下げによって、宗教共同体が解体を始める。他方の王国については、多種多様で広大な地域の住民を臣民として包含しながら、神聖君主の正統性はフランス革命を経て衰退するものの、規格化され王際承認を要する君主制が、国民的意匠を獲得しながらかろうじて20世紀初頭まで延命することになる。この両文化システムの衰退過程のなかで、出版資本主義にもとづく「同時性の観念」（つまり社会的有機体が均質で空虚な時間のなかを暦に従って移動していくという観念）が社会的に共有されて初めて、「想像の国民共同体」が出現した。

この点の精査は後段に譲ろう。今はアンダーソン固有の文脈をいったん離れて、宗教とナショナリズムの類比にかんする現代的意義を探っておきたい。

言うまでもなく、宗教とナショナリズムの類似性の指摘は、何もアンダーソンの独創ではない。たとえば、すでにヘイズ（Carlton J.H.Hayes）は1960年に「世俗的ナショナリズムを一つの宗教」と呼んでいるし、スマート（Ninian Smart）に至っては「部族宗教」になぞらえるといった具合である。

ユルゲンスマイヤーによると、西欧型の世俗的ナショナリズムは「一種の宗教」であり、キリスト教的な普遍性に依拠する世界観だ、と宗教的ナショナリズムの指導者たちは受け取っているという。両者が衝突するのは、

「秩序のイデオロギー」としての社会的機能が似通っているからである。すなわち、両者はともに、世界を首尾一貫した、管理可能なやり方で認識し、日常世界の水面下には見えないものに首尾一貫性を与える意味の次元が存在していることを示唆し、その存在の道理に社会的政治的秩序を与える権威を付与し、社会全体にたいする個々人の正しいあり方を定めるのである。

世俗的ナショナリズムが社会の支配的なパラダイムとなっているアメリカやヨーロッパでは、宗教をナショナリズムに収容するか、政治勢力として周辺に追いやるかどちらかの対応を行い、一定の成功を収めてきた。だが、ナセルやネルーなどといった第三世界の新興諸国の第1世代のリーダーたちは、世俗的ナショナリズムにもとづいて宗教との調和をはかりつつそれを政治共同体の周辺に追いやろうとして失敗した。こうした諸国に現れたのは、西欧型の世俗的ナショナリズムではなく「宗教的ナショナリズム」にもとづく国民国家建設である。これは、ナショナリズムの歴史上、類のない新しい現象なのである（Juergensmeyer 1993: 邦訳 28-59 頁）。

現代の宗教紛争をみるとき、このユルゲンスマイヤーの指摘は傾聴に値しよう。わがアンダーソンは現代のナショナリズムを宗教との関係でどう特徴づけているのだろうか。結論的にいえば、成立期のナショナリズムと宗教との代替的關係には触れておきながら、展開期のそれについて、かれは十分に検討を加えてはいない。反植民地ナショナリズム以降の現代ナショナリズムについても事情は同じである。それはなぜだろうか。

## 2. モジュールの伝播、「海賊版」の作成

そうなった理由は、案外単純なところにあるのではないだろうか。それは、一つには、世界史的なナショナリズム成立と伝播にかんするアンダーソンの分析範囲に起因している。アンダーソンは、「クレオール・ナショナリズム」、「ヨーロッパの言語/俗語ナショナリズム」、「公定ナショナリズム」、「植民地ナショナリズム」というモデルの模倣と拡散によって、ナショナリズムの世界史的展開を理解しようとした。だが、こうしたプロセスの

理解の中で、南アジアや中東という地域は分析の対象から原則的に排除され、インドネシアとシャムが「植民地ナショナリズム」の事例として集中的に取り上げられたところに、宗教ナショナリズムの検討が欠落する理由があったと思われる<sup>(5)</sup>。

かれは、まずナショナリズムの起源を南北アメリカの「クレオール・ナショナリズム」に求め、通説であるヨーロッパ起源説を一蹴した。かれによれば、南北アメリカの独立運動は、それについての出版が行われるようになるとすぐに「概念」、「モデル」、そして実に「ブループリント」となり、遅くとも1810年代にはこれがナショナリズムの「海賊版」作成に利用可能となった。19世紀ヨーロッパでは、アメリカの独立運動とフランス革命をモデルとして、民族言語的なナショナリズム運動が高まる。

多言語領域を抱え込んでいた当時のヨーロッパ諸王国は、「公定ナショナリズム」を案出し、これに対応していく。19世紀半ば以降における帝政ロシア化、イギリス化、日本の藩閥政府、シャム、ハンガリーの事例を踏まえて、アンダーソンは、公定ナショナリズムという「国民と王朝帝国との意図的合図」が「それに先立つ、主として自然発生的な民衆ナショナリズムのモデルを翻案した、たとえ反動的とは言わないにしても、保守的な政策であった」ことを明らかにしたのであった。帝国主義諸国がアジアやアフリカの植民地で実施したのも、まずこの「公定ナショナリズム」であった。日本やシャムのように海外列強の直接支配を免れた地域の現地支配層にも意図的にこれが使用され模倣されていく（Anderson 前掲書、12-3, 136-7, 144-8, 175 頁）<sup>(6)</sup>。

20世紀に入ってA.A諸国に押し寄せたナショナリズムの「最後の波」は、「植民地ナショナリズム」であった。このモデルは、非ヨーロッパ言語を国家語としてもちえた点で「クレオール・ナショナリズム」と類似し、「ヨーロッパの言語／俗語ナショナリズム」からは強烈な人民主義を、「公定ナショナリズム」からはロシア化の政策志向（国家統制下の初等義務教育、国

家の組織する宣伝活動，国史の編纂，軍国主義等々）を継承していた（同上，188-9頁）<sup>(7)</sup>。

### 3. 国民語と出版資本主義

だが，このアンダーソンの理解は，「宗教ナショナリズム」の検討を欠落するという難点を抱えつつも，アメリカとヨーロッパにある「並存感」の把握をつうじて，世界史的規模でナショナリズムを把握し，ヨーロッパ・モデルを相対化しうるとともに，人々の移動，旅，「流浪」といった契機に着眼することによって，のちの「遠隔地ナショナリズム」論へと展開していく足場となり得た。

まず，周辺部（南北アメリカ）から捉え返してみることで，いくつかの重要な論点が浮かび上がってくる。すぐさま言語，国民語はネーション成立時の争点となりえなかったことが明らかになる。すでに述べたように，言語ナショナリズムはヨーロッパ・ナショナリズムの特徴である。ヨーロッパでは，同胞「白人」移民が国民国家建設に先んじたことに衝撃を受けた。「国民主義運動が面妖にもなぜ文明化した旧世界でかくもはっきりとあの野蛮な新世界よりも遅れて登場することになったのかを説明する」必要があった。「兄弟競争」こそ，クレオールとヨーロッパのアンビバレンツの源泉である。

そうしてヨーロッパの「新しい」ナショナリズムは，その理由を「遅い目覚め」にあったという解釈を編み出していく。これによって大いなる歴史的伝統が想起され，その核心として「言語」が「再発見」される。この「伝統からの覚醒」までは，少なくとも18世紀末になるまではフランス語，英語，スペイン語が「領土的に定義された集団」に帰属するなどということとは考えられなかった。これらの俗語に親しんでいなかった国民主義的インテリゲンチヤは，その言語修得課程を「自らの中に眠っていた本質を再発見する過程」と見なした（同上，312-22頁）。

言語がいったんそうした歴史的連続性の中心に据えられると，その原初

性（言語には誕生日がない）や特殊な同時存在的な共同性（国家斉唱時に典型的に現れる一体感）によって、またたくまに「国民的想像力」によって不可欠で自然な存在となる（同上、238-9頁）。

そこでアンダーソンは注意をわれわれに促す。「ガーナ・ナショナリズムはその国民語がアシャンティ語ではなく英語なので、インドネシア・ナショナリズムほど本物ではない、などということを示唆するものは何もない。時にナショナリズム・イデオログがやるように、言語を、国民というもの(nationess)というものの表象として、旗、衣装、民俗舞踊その他と同じように扱うというのは、常に誤りである。言語において、そんなことよりずっと重要なことは、それが想像の共同体を生み出し、かくして特定の連帯を構築するというその能力にある。……言語は排斥的手段ではない。原則として、誰でも、どの言語でも学ぶことができる。それどころか、言語は本質的に包摂的であり、誰でもすべての言語を学べるほど長生きできないという、あの有名なバベルの宿命にだけによって制約されている。ナショナリズムを発明したのは出版語である。決してある特定の言語が本質としてナショナリズムを生み出すのではない」(同上、邦訳210-11頁)<sup>(8)</sup>。

言語ではなく出版語こそがナショナリズムの基礎となるというこの指摘を、われわれも注視しておこう。想像の国民共同体が出現するためには、世界理解の様式のなかに、独自の「同時性の観念」が芽生えなければならなかった。アンダーソンは「小説」と「新聞」という想像の様式に注目し、それが、「社会的有機体が均質で空虚な時間のなかを暦に従って移動していく」という観念を読者に与え、そうして見ず知らずの国民を想像しうる空間を提供した点を強調する (Anderson *ibid.*, 47-64 頁)<sup>(9)</sup>。

新たな国民共同体の想像を可能にするという要因として、「ラテン語の秘教化、宗教改革、行政俗語の偶然的発展」は、せいぜい、ラテン語を王座から追放し、キリスト教世界を腐食させるという消極的な意義をもつにすぎなかった。資本主義、印刷・出版技術、宿命的な人間の言語的多様性—

これらの要因の、偶然的だが爆発的な相互作用こそが、積極的な意義を有したのである（同上、76-87頁）。

ところで、印刷出版がラジオやテレビという同盟者を得た現代のナショナリズムは、かつてのナショナリズム以上にモジュール的性格をもっている。国民国家が圧倒的な規範となっている現代世界において、こうした技術的歴史的条件の変化は、国民意識に重大な変化をもたらすであろう。いまや国民は領土的・言語的共同体なしに想像することが可能になったのである。通信や運輸における革命的技術進歩は国民的想像力に新たな性格を付与しつつある（同上、212頁）。

## II. 資本主義の変質と新しいナショナリズム

本稿冒頭で概観したように、アンダーソンの研究経歴からいってかれのなかで資本主義という認識が一定のウェートをしめるに至ったのは、『想像の共同体』執筆直前のことであった。私には、（各章の総括を行う箇所ではとりわけ）アンダーソンが資本主義とナショナリズムの関係を繰り返し強調しているにもかかわらず、どうして多くの論者がこれを無視ないし軽視するのか疑問でならなかった。さらに『想像の共同体』以降、かれは、資本主義論の視角から自らのナショナリズム論を再読しているかのようにすら見えはしないだろうか。あるいは、その作業を通じて、かれのナショナリズム論のモチーフがより鮮明になったとはいえないだろうか。

『想像の共同体』執筆後、とりわけ注目に値する論考は、「新世界無秩序」（“the New World Disorder”）と「エクソダス」（“Exodus”）である。両者はそれぞれ資本主義と「遠隔地ナショナリスト」、すなわち母国を離れながらそこでの紛争にメディアを利用して関与するナショナリストの出現をテーマとしているが、切り口が微妙に異なる。前者は、大量移民と民族紛争との関連を、後者は「流浪」との関連を関連を主たるモチーフとしている。以下ではこの2つの論考を取り上げ、検討を加えることにしよう。

### 1. 「遠隔地ナショナリズム」論の展開

「新世界無秩序」は、2050年の歴史家たちが現代の構造的変動過程を2世紀にわたる「大帝国の崩壊過程の一部」と見なすのではないか、という挑発的な文言から始まる。19世紀初頭のスペイン帝国、第一次大戦後のヨーロッパの諸王国の崩壊、清朝の崩壊、あるいはソ連の崩壊が、その過程に含まれる。

問題は、こうした帝国の崩壊過程から発生する現代のナショナリズム（あるいはその「弟分」であるエスニシティ）について、有効な分析がなされていないところにある。まずアンダーソンが取り上げるのは4つの幻想にもとづく現状認識である。第一に、現在の民族紛争について、「統合」こそが常態で、「解体」「断片化」の過程は異常だと見なす幻想がある。これは、歴史を忘却した現状維持的な言説である。第二に、資本主義、市場、国家にの規模の関係にかんする誤解である。大国民国家こそ資本主義的な市場競争を勝ち抜く条件だと見なすこの認識は、すでに政治経済学の方野では批判的である（たとえばローズクランズの「バーチャル国家論」）。第三に、多国籍企業がナショナリズムを時代遅れにする、という考え方である。だが、国益と企業の利益の不一致は今に始まったことでもないし、多国籍企業の経営コントロールは圧倒的に先進国本国によるものである<sup>(10)</sup>。第四に、資本主義的な市場経済は戦争よりも平和を指向する、という幻想である。2つの世界大戦を主導した国々や第二次大戦後に多くの戦争に関与したアメリカの経済体制を思い浮かべれば、答えは明白であろう。

加えて、支配的なエスニック理論やナショナリズム論に説明能力があるわけでもない。それらが解釈するのとは異なり、経済的な不満や相対的剝奪感が原動力になるのは、ナショナリズム運動に限っての話ではないし、ナショナリズムは伝統的なコミュニティから歴史的に発生したものでもない。

アンダーソンの解答はここでは簡潔である。「ナショナリズムとエスニシ

ティを生み出した要因で、最も重要と思われるものは2つあり、ともに資本主義の出現と密接に結びついている。それらの要点を手短にいうとマス・コミュニケーションと大量移民である」(Anderson 1991: 邦訳 179-85 頁)。

前者については、既述したので検討を控えよう。ここでは後者の論点が重要である。近代初期以降、長距離輸送手段の発達によって拡大・加速してきた移民は、ますます市場経済との結びつきを強めている。だが、他の商品とは違って市場で取引きされるといっても「人間には記憶や習慣、信念や食習慣、音楽や性欲も備わっている。人間のこれらの特徴は、それぞれが生まれた場所では自然の一部となっており、特に意識されることはないが、現代世界を流浪する人々にとってはにわかに重大な意味をもつようになる」。

すでにみたように、アメリカ両大陸に住んで母国を見たことのないスペイン語系、アイルランド系の人々は、クレオールあるいは植民地人という呼称でヨーロッパ人から蔑まれ「落ちぶれたヨーロッパ人」としてアイデンティティの拠り所を失った。だが、その結果、ナショナリズムを発展させ、先住民を支配し、「アメリカ」という国民国家建設が可能となったという意味では、まだ幸福であった。さらにスペインやイギリス以外の国々から移民を呼び寄せ、自分たち自身の社会的地位の安定といっそうの資本蓄積を可能にした事情もかれらに味方した<sup>(11)</sup>。

ここから現代の民族紛争を解く鍵が与えられる。中心部への大量移民たちは、コミュニティを形成し、祖国と離れるがゆえに自らのアイデンティティを維持し確認しようと努めるし、また受け入れ国側ではこれにたいする反発が生まれよう。また、植民地から独立した諸国では、エスニック・ラインに沿う形で編成された軍隊が、国民主権を守るところか国内の民族諸集団の紛争を激化させる原因となっている。

## 2. 「流浪」と資本主義

アンダーソンは、「資本主義、すなわち 16 世紀半ばから、自由意思、年

季契約、奴隷といったさまざまな立場にある数百万の人々を数千マイルの大洋を越えて運ぶだけの輸送手段」、その使用を可能にした「印刷資本主義」の両者が相まって、18世紀半ば以降のナショナリズム運動、とりわけアメリカ地域のそれに基礎を提供したことに注目してきた。そこで「エクソダス」での焦点は、「流浪」に置かれる。

まずインダストリアルイズムは、まず鉄道敷設による国内外にわたる人口移動という「流浪」を生み出した。さらに、公教育制度の普及による「標準化された国語」の制定をつうじて、国語と方言の間のヒエラルヒーを形成し、若者を中心に「一種の流浪と同じ効果」をもたらした。こうして「自分が流浪の身であるかのごとく、自分のチェコ語を後から修得したドイツ語の世界を通じて眺めるようにならざるを得ない」ようなバイリンガルの若者たちが、20世紀前半のヨーロッパで、あるいは20世紀後半のA.A諸国でナショナリズム運動の担い手となっていったのであった。

そしてそこには、言語＝母語の確定と獲得、それを中心とした歴史的伝統の再発見、混血性の解消という契機が孕まれざるを得ないだろう。アンダーソンがかつて「眠りからの目覚め」と呼んでいたプロセスは、いまや「流浪からの帰還のプロジェクトとしての国民国家の形成」として捉え返されるのである（Anderson 1994, 邦訳4-6頁）。<sup>(12)</sup>

しかし皮肉なことに、1919年の国際連盟創設で古典的な国民国家構想がまさに全盛期に入ったとたんに、資本主義の進歩がその土台を掘り崩し始めたのであった。まずそれは輸送（蒸気機関から自動車、飛行機へ）とコミュニケーション（新聞からラジオ、テレビ、ビデオ、PCへ）の分野における進歩からもたらされた。これによって、周辺部から中心部への移民の逆流が加速する。さらに、かつて「小説」や「新聞」において「想像」された祖国との主観的距離感は、著しく圧縮され、変質した（同上, 7-9頁）。

これにともなって2つの政治的課題が浮上してくる。一つは、国内外への移動が当たり前になった時代において、市民権付与の条件であった出生

証明が「一種のニセ金に近いもの」になったということである。偽造パスポートの存在とその市場価値とを対比すればそれは明らかだ。だが、このパスポートですら、市民権も国民国家への忠誠心も証明するものではなくなり、たんなる労働市場への参加証明書になったという意味で、ニセ金化しつつあるといえる。出生証明、市民権、パスポートのもつ政治的重要性が低下する事態の裏側で進展しているのが、「古い国民国家でのエスニシティの勃興」あるいは人種差別主義の勃興である。ルベンが排撃するフランスの「よそ者」とは、「アルジェリアのパスポートをもつ移民ではなく、政治的な意味でのフランスにおける『非フランス人』フランス市民である」(同上、11-13頁)<sup>(13)</sup>。

そしてもう一つの政治的課題が「遠隔地ナショナリズム」の出現であった。

### 3. 情報資本主義と主権・市民権の変質

20世紀に入って輸送とコミュニケーションの分野は飛躍的な技術進歩を遂げてきたが、このことは、ナショナリストにとって想像の空間と運動の形態変化を迫らずにはいないものであった。「中央集権化した国家権力や独裁体制と戦っている民族集団やマイノリティーの活動はこれらの情報伝達の革命とともに進行している。さらに、敵に対する憎しみや怒りと同時に恐怖心を煽りパニックを引き起こすことで暴力に火をつけ油を注ぐような悪質なうわさもまた、メディアを通して素早く伝わってしまうことになる」(Tambiah 1992, 邦訳 59-60 頁)。

そうした運動が対立する先進的「民主主義国家」の政治指導者でさえも、管理能力が十分には及ばない空間で、このナショナリズムは作動する。たとえば、IRAの運動が根強い理由として、米国や英国に存在する支持者層からの支援や国際軍需市場での武器調達の容易さなどは無視できないし、あるいはインドのカリスタン独立を目指す「ジャフナの虎」に武力闘争の支援をしているのは、パンジャブではなくメルボルンやシカゴのビジネス街

に住む在外インド人たちである。かれらは「タミルネット」のコンピューターでつながった世界中のあらゆる場所から支援を行っているのだ。トロントに定住しているウクライナ人、ロンドンのジャマイカ出身者、ニューヨークのユダヤ人、ロサンゼルスของベトナム人、ベルリンのトルコ人にも同じことがあてはまるだろう。

ナショナリズムやエスニシティの現代的形態は、こうした情報技術と輸送技術の革新という時代背景抜きには理解できない。古典的な「想像の共同体」が「出版資本主義」にもとづく領土的・言語的共同体を迂回したとすれば、「遠隔地ナショナリズム」は、いわばサイバー・スペースを迂回して成立する。そこに、われわれは脱＝領土化しつつある民族(nation)の姿を見出すであろう。「過去150年以上にわたって戦争や政治的抑圧と同様、市場によって生みだされた膨大な数の移民は、どんな人でもある国に居住すれば、その国を祖国あるいは母国と思い、国民感情を自然に抱くようになるのが当たり前という古い考えを、根底からくつがえしてきたといつてよい。……こうした人々は、法律上では移住先の国で市民権を取り快適な生活を営んでいる国民だが、その国にほとんど愛着を感じずに、今やファックスで寸時の距離に存在するようになった、彼らの想像上の故郷(imagined Heimat)で生じている戦いに、プロパガンダ、武器あるいは投票以外のあらゆる方法を利用して参加することによって、アイデンティティを基にした政治活動に加わりたという誘惑を感じている」(Anderson 1994, 邦訳14頁；同1992, 邦訳190-1頁)。

「遠隔地ナショナリズム」のもたらす最大の災厄は、その支援者たちの無責任さに発するといつてよい。かれらは、納税や裁判を受ける義務を負わず、「監獄、拷問、死を恐れる必要はなく、近親者が参加しようとしている国に住んでいる必要もない。第一世界で安全な生活をしながら、資金や武器を送り、宣伝を行い、世界的なコンピューター・ネットワークを張り巡らす、こうしたすべてのことが対象となった国に予測のつかない結果をも

たらず」(Anderson 1994, 邦訳 14- 5 頁)。この距離に発する無責任さは、インターネット上の匿名性が、ときとしてねばりつくような悪意をはらむのと相即的である。

しかしながら、こうした市民権の変質は、移民集団にのみ生じた事態ではない。グローバル経済の下で近代国家の成立条件である主権、排他的領土性、市民権のセットそのものが変質しつつあるのだ。サッセン(1996)は「経済的市民権 (economic citizenship)」という概念を提唱してこうした現状を捉えようと試みている。

この「経済的市民権」という概念は、伝統的に理解されてきた市民権概念とは別種のものである。「経済的市民権」は、市民に帰属するのではなく、企業や市場、とくにグローバルな金融市場に帰属する。グローバルな金融市場の編成は、現在、市民権と結びついたアカウントビリティ機能を担い、政府の経済政策に対して投票(投資や投機)をつうじて却下や承諾の意思表示を行いうる。この意味で、グローバルな金融市場は、グローバルに越境する経済的選挙民の一種として立ち現れてきたのである。資本登記がここでは選挙人登録にあたる。なるほどこれらの市場は多様な投資家による多様な判断の積み重ねにもとづく民主的手続きを形式的には踏まえているが、あらゆる「投票者」は、資本を所有せねばならず、しかも小口の投資家たちは、通例、年金基金、銀行、ヘッジ・ファンドといった機関投資家を通してしか機能しえない。このことによって、ある国の大多数の住民は、何の発言権もないまま、事実上、意思決定のプロセスから排除されてしまうのである。こうして「よき」国民の条件であるはずの市民権は、政治的価値を低下させ、同時に市場に収奪されつつある (*ibid.*, pp. 51-2)。

#### おわりに：残された課題

アンダーソンは、スカルノたちによせたような共感を「遠隔地ナショナリスト」には抱いていないようだ。『想像の共同体』末尾では、インドシナ

半島における社会主義国同士の戦争に立ち返って『『マルクス主義それ自体はナショナリストではない』とか、『ナショナリズムは近代発展史の病理である』といったフィクションを捨て去らないかぎり、そしてそのかわりに、遅ればせながらも、過去の本当の、そして想像の経験を学ぼう、最善をつくすのでないかぎり、そうした戦争を制限したり予防したりするために、何ら有効なこととはできないだろう」と展望し得たアンダーソンであったが、「遠隔地ナショナリズム」にかんする記述からは、当惑と抑制された怒りだけが伝わってくる。現代ナショナリズム論のいっそうの彫琢は、新著(*The Spectre of Comparison: Politics, Culture, and the Nation*)に委ねられるところだろう。

われわれは、アンダーソンのナショナリズム論にできる限り即する形で、その支柱となる資本主義論を評価しようと試みてきた。アンダーソンは、サイバー・スペースを迂回して成立する「遠隔地ナショナリズム」が、世界的規模での流浪あるいは大量移民の結果、領土という国民国家の足場から切り離れて作動しつつある点を明らかにした。だが、この「遠隔地ナショナリスト」が住まう政治的空間は、資本の経済的空間でもある。そこには、「経済的市民権」を有する、グローバル化した金融市場が定位しようとしている。ナショナリズムの政治主義とグローバリズムの経済主義が同時代の産物だとすれば、われわれが解明しなければならないのは、その混濁した問題圏である。

# 【注】

- (1) ハースの書評は以下のように続く。「本書は社会的動員にかんする統計よりもむしろナショナリストの詩にかんするきわめて主観的な解釈に依拠している。東南アジアのナショナリストとかれらの思想にかんするスケッチのなかには、言語政策にかんする断片的情報と同様、大いに学ぶべき点もある。だが、その全体的まとめりといえは、一貫するまでに練り上げられていない。

最初のモデルを提供した国々に――フランス、アメリカ、イギリス、ドイツ――のナショナリズムについては、ほとんど何も述べられていない。わずかにその模倣者だけが取り扱われているだけであって、アンダーソンは、なぜその事例にあげられたネーションのある側面が選ばれて、別の面では駄目なのかを説明できていない。ナショナリズムに焦点を当てることの特別な理由付けにはなってくれないが、歴史的な連続性を指摘することこそが適切な作業である」(Haas, *ibid.* 下線は引用者)。だが、このハースの後段は、アンダーソン批判としては的外れだと私は考える。かれがその後で展開した図式的なナショナリズム(類型)論を読むと、さもありなんという気がする。

- (2a) 繰り返しになるが、戦争と死は、アンダーソンのナショナリズム論の一つの通奏低音である。バラクリシュナン(1995)は、「現代世界の言語にかかわる社会的組織(学校、新聞、小説)がネーションの古さや不滅性にたいする信念を引き起こす」というアンダーソンの主張を批判し、出版資本主義が形成した文化的類縁性だけでは、近代の人々が時として進んで払った膨大な犠牲を生み出す理由が説明できず、それだけでは世俗の市民社会がいかにして宗教と同じパトスを鼓舞するのかは理解困難だ、と主張する。平時ではなく戦時になってはじめてネーションは想像の領域を支配する共同体となる。アンダーソン自身の議論は、この点で一貫していない、というのである。だが問題は平時と戦時を区別することではなく、両者を連絡するところにある。

富山(1995)は、H. バーバやF. ファノンと問題意識を共有しつつ、沖縄戦という戦場と日常生活を重ね合わせ往復する作業をつうじて、ナショナルな語りが生み出す「想像の共同体」の「均質で空虚な時間」に回収されない、臨界的な領域としての「証言の領域」を見出そうとしている。それは、植民地主義の人種化された言説も反植民地主義ナショナリストの伝統文化発見の言説もともに拒否し、不確定で反復的な「遂行的時間」においてのみ存立する。富山の理解が一種の迫力をもつのは、歴史の物質的暴力を回収することに成功しているからだと考える。アンダーソン解釈、ひいてはナショナリズ

ム論における一つの符丁と化している、「記憶/忘却」あるいは「語り/物語ること」という用語についても、富山の文脈では、そこに担保された歴史のマテリアリティが説得力をもたらしていると考ええる。（注7）も参照。

- (2b) あわせて、『経済と社会』『ネーション』章におけるウェーバーの明快な議論を見ておこう。かれにとってネーションとは「価値の領域」に属す概念であり、「言語共同体」とは同一視できるものではなく、「共通の血」に支えられるものでもなかった。「政治的共同体は、その行為が、少なくとも通常状況下では、生命や移動の自由を危険にさらすという抑圧を含んでいる共同体の一つである。個人は、究極的には、集団の利害のために死に直面することを期待されている。このことによって、政治的共同体はその特別なパトスを得、絶えることのない情緒の基盤を築き上げる。政治的宿命の共同体、つまり何よりも生死をかけた共通の政治闘争を戦う共同体は、一体化された記憶(joint memories)をもつ集団を生み出してきたが、この記憶が、たんなる文化的・言語的・民族的(ethnic)な紐帯よりも奥深い衝動をしばしばもたらしてきたのである。この『記憶の共同体』こそ、究極的にナショナルな意識の決定的な要素をなすものにほかならない」(Weber 1978: 922-3)。

- (3) 西欧中世史家カントロビッチは、「祖国のために死ぬこと」という観念をギリシャ・ローマの時代から追跡して、「神秘体」という言葉が「13世紀になると教会と世俗国家の双方を、それからは世俗の共同体、道徳的政治体のすべてを意味するようになり、かつ、イギリスでもフランスでもそうであったように、それは人民の定義すら変えてしまったことを指摘している（「一つの神秘体に集められた人々」）。こうして「祖国のための死がもつ半宗教的な側面は、はっきりとキリスト教信仰に由来するものであり、その力がいまや、国家という世俗の『神秘体』のために役立ったのであった」(Kantorowics 1951: 邦訳 1-29 頁)と結論づけている。

- (4) ギ・ソルマンは、イスラム原理主義から、ヒンズー原理主義、スラブ第一主義までを含む、こうした原理主義的諸潮流の背景に、「近代化の失敗」を看

取しておく必要がある、という。この三つの原理主義の共通点は、社会状態が酷似しているというところにある。その状態とは、片や西欧的近代化、片や従来の伝統とこの近代化のどちらも選べない状態、あるいは近代化に参加できない状態との対立だといえる。原理主義は、(資本主義と社会主義の総合とか、地域にもとづいた近代化への道といった) 新しい「第三の道」を探して、この対立から逃れようとする試みでもある。そうした試みの挫折を受けて、原理主義者は地域の文化や宗教を犠牲にすることなく近代化する方法を探ろうとする。したがって、原理主義は、単純な復古運動でも保守主義でもなく、「挫折した近代化のプロジェクト」から生まれている。明らかに原理主義運動は、硬直した社会の中からではなく、都市化、産業化、農業改革が行われて、その基盤がすでに変化した社会に出現しているし、イランのホメイニ師、イスラム原理主義の指導者ハッサン・エル・ヘジャワル、ヒンズー原理主義運動を率いるケシャフ・ヘジャワルといった原理主義の創始者たちも、宗教的共同体に属する古くからの指導者ではない。西欧で暮らし、西欧を知る新しいエリートである (Sorman 1994, 邦訳 217- 9 頁)。

- (6) この点に植民地本国がどうかかわり、また、ナショナリズムの成立にあてえた空間理解がいかに変化したかを取り扱うことで、初期「第三世界」ナショナリズムのモデル化過程が単純だ、という批判に応えようとしたのが、増補版『想像の共同体』「第X章 人口調査、地図、博物館」である。植民地ナショナリズムは、19世紀ヨーロッパ王朝国家の「公定ナショナリズム」をモデルとした、という見解を自己批判して、アンダーソンはその直接の系譜を(一見反国民主義的であったように見える)「植民地国家」の想像の仕方、それを支えた3つの制度(人口調査、地図、博物館)に求めた。というのは、「これらの制度が一緒になって、植民地国家がその支配領域を想像するその仕方---その支配下にある人間がだれであるかという性格付け、その領域の地理、その系譜の正統性---を根底的にかたち作った」からである (Anderson 前掲書, 邦訳 274-5 頁)。

- (7) チャタージ(1993)のアンダーソン批判も、この植民地ナショナリズムの把握をめぐってなされている。反植民地ナショナリズムはモデューラーとしては把握できない独自の発展を遂げた。その独自性は、外的で物質的な領域でなく、内的で精神的な領域における反帝国主義闘争にある。二重言語のエリートは母語こそが植民地権力が立ち入ることのできない文化的アイデンティティの中核だ、と考えた。だから言語こそがネーションが主権を確立する領域となったのだ、というのである(*ibid.*, 216-18)。文化=言語をネーションと短絡させた、この発想の問題点については、酒井(1996)の秀逸な論評をみよ。
- (8) ホブズボームはこう指摘している。「今日、われわれは人種=言語による民族の定義にあまりにも慣れ親しんでいるため、この定義が本来、19世紀末に創案されたものだということを忘れている。……言語ナショナリズムは言葉話す人間を創り出すのではなく、読み書きする人間を創り出したのであった。彼らが自民族の基本的特性をその中に見出した『国語』は、たいていの場合、人工的なものだった」(*Hobsbawm* 1987: 邦訳 206-8頁)。

またバリバールは、世界システム論とアンダーソンの議論を援用しながら次のように興味深い立論を行っている。かれはまず、「中核」/「半周辺」/「周辺」というヒエラルヒー的に編成される世界経済の形態と、国民形成が対応している、とみなす。中核地域が世界経済という「全蓄積空間」をコントロールするためには、「国民形態」という特権的地位をとらねばならない。それを獲得する諸階級の闘争に勝ち抜くには、「国家ブルジョワジー」が生み出されるかどうかが決定的である。(*ibid.*, 邦訳 164頁)。

ここで「支配的ブルジョワジーとブルジョワ的社会構成体は、『主体なき過程』を通じて相互に構成され、国家を国民的形態において再構築すると同時に、他のすべての階級の地位を変容させる」わけであるが、さらなる問題は「社会の国民化」である。あるいは「社会構成体が自らを国民として再生産する」場合の方法と条件である。

ここからバリバールは、いかなる近代国民も所与の「エスニック」な基

礎から生まれてくるのではなく、むしろ逆に、民族(people)は創出される、と強調する。つまり、「諸社会構成体が国民化するのに応じて、諸社会共同体に包摂されている住民・・・が『エスニック化』するのである。言い換えれば、・・・そこに包摂されている住民は過去においても将来においても、あたかも彼らが自然的共同体を形成し、個人的および社会的条件を超越するような、起源・文化・利害の同一性を自然に備えているかのように表現/上演される(represented)のである」。これをかれは「虚構的エスニシティ」と呼ぶ。

かれは、相互補完的に包摂と排除のメカニズムを形成していく「言語」と「人種」こそ、虚構的エスニシティの作動に不可欠な制度的与件なのだ、と看破する。「エスニシティの創出とは、言語の人種化であり、人種の言語化である」。そうしてさらに、教育と家族制度の役割、人種差別と性差別の補完性へと論を進めるのである(Balibar & Wallerstein 1997, 邦訳 174-88 頁)。

- (9) 多くの論者は、アンダーソンのいうこの「空虚で均質な時空間」を抽象的な「認識図式」として解釈する。たとえば、大澤(1996)は、「B. アンダーソンのナショナリズム論は、〈ネーション〉の成立を文学的な現象であるということ看破していた点で傑出している。アンダーソンは、『小説』という様式が〈ネーション〉の成立とほぼ相即して誕生した点に注目している。〈ネーション〉と小説が常にほぼ同時に登場してくるのは、〈ネーション〉という共同性を可能にする態度と、小説の文体を可能にする態度とが、同一のものだからである」(34-5 頁、強調は引用者)と指摘している。私が関心を寄せるのは、この国民的想像力の時空間が制度化される具体的な様相である(アンダーソンにもそうした理解がある、と考えている)。したがって、たとえば「大雑把な骨子」にせよ、大澤のように「資本制とは、基本的には、社会システムにおいて妥当する規範の普遍化を指向するダイナミズムである」と定義されると、首を深く傾げざるを得ない。付言すると、同じく長野(1996)のアンダーソン解釈も言葉遊び以上のものとしては読めなかった。

ところで、アンダーソンがいうナショナリズム成立の前提をなす「空虚で均質な時空間」の構築にとっては、出版業と並んで、近代産業としての時計産業の役割が決定的であった。ルイス・マンフィールドは次のように記している。「近代の産業化時代を実現した鍵というべき機械は、蒸気機関ではなく、むしろ時計の方であった。正確なエネルギー量の確定もしくは規格化とオートマティックな動きを可能にした時計は、固有の製品である正確な時間を武器にして近代テクノロジーの最初の機械となった。一方、洋上における船舶の位置測定がさらに制度を増したことも、産業の発達を促す上で決定的な誘因となった」（Attali 1982:邦訳201-2頁）。

- (10) こうした認識は、S・ストレンジやP・ドラッカーらのそれと照応する（敢えて命名すれば「反グローバリズム」の認識）。この論点は、簡単には原田(1997)で触れておいた。詳述は次稿に譲りたい。
- (11) この「アメリカ・モデル」を継承したのが、新定住地域への白人移民である。またこれと対照的だったのは、黒人、中国人、インド人、アラブ人などの非白人系移民の運命である。これについては、本山(1981)によるW.A.ルイス(1978)解釈を参照されたい。
- (12) ナショナリズムと「流浪」の関係を最初に明示したのは、アクトン卿(1862)であろう。「抑圧がリベラリズムの学校であるように、流浪(exile)はナショナリティの苗床である」(ibid.,28)。同時のこの言及が、マッツイーニの思想と行動を論ずる文脈でなされた点にも注意したい。
- (13) 希薄化し始めたのは、ネーションの領土性である。それとともに、頭をもたげ始めたのは、生物学的ならぬ文化主義的な人種主義、「人種なき人種主義」であった。領土と出生地にかわって、「文化」が「自然」として新たな差別化の機能を発揮し始めたのである(Balibar & Wallerstein 1991, 邦訳37-9頁)。われわれが単純な多文化主義の立場をとらない理由については、酒井(1996)もあわせて参照せよ。

【参考文献】

Acton, Lord (1862) “Nationality” in Gopal Balakrishnan (ed.) *Mapping the Nation*, Verso, 1996.

Anderson, Benedict (1990) *Language and Power: Exploring Political Cultures in Indonesia*, Cornell U.P. (中島成久訳『言語と権力』日本エディタースクール, 1995 年)

----- (1991) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* [ Revised Edition ], Verso (白石隆・白石さや訳『増補 想像の共同体』, NTT 出版, 1997 年)。

----- (1992) “The New World Disorder” , *New Left Review*, No.193.  
(関根政美抄訳「<遠隔地ナショナリズム>の出現」『世界』1993 年 9 月号)。

----- (1994) “Exodus” , *Critical Inquiry*, No.20. (永山博之訳「エクソダス」『みすず』, 第 401 号, 1994 年 8 月号)。

Attali, Jacques (1982) *Histoires du Temps*, Libraire Arthème Fayard (蔵持不三也訳『時間の歴史』原書房, 1986 年)

Balakrishnan, Gopal (1995) “The National Imagination” in Gopal Balakrishnan (ed.), *ibid.*

Balibar, Etienne & Immanuel Wallerstein (1990) *Race, Nation, Classe: Les Identités Ambiguës*, Editions La Decouverte (若森章孝ほか訳, 『人種・国民・階級』, 大村書店, 1997 年)

Chatterjee, Partha (1993) “Whose Imagined Community?” in Gopal Balakrishnan (ed.) *ibid.*

Elkins, David J. (1995) *Beyond Sovereignty: Territory and Political Economy in the 21st Century*, U.P.Toronto.

Haas, Ernst B. (1986) “What Is Nationalism and Why Should We Study It?” *International Organization* Vol.40, No. 3

Hobsbawm, Eric (1987) *The Age of Empire: 1875-1914*, Weidenfeld and Nicolson (野

口建彦ほか訳『帝国の時代 1』, みすず書房, 1992 年)。

----- (1975) *The Age of Capital: 1848-75* (柳父・松尾ほか訳『資本の時代  
1・2』, みすず書房, 1981・82 年)

Juergensmeyer, Mark (1993) *The New Cold War?: Religious Nationalism Confronts the  
Secular State* (阿部美哉訳『ナショナリズムの世俗性と宗教性』玉川大学出版  
部, 1995 年)。

Kantrowics, Ernst (1951) “*Pro Patria Mori in Medieval Political Thought*” *American  
Historical Review*, LVI. (甚野尚志訳『祖国のために死ぬこと』みすず書房,  
1993 年, 所収)

Lewis, W.A. (1971) *The Evolution of International Economic Order*, Princeton U.P.

Sassen, Saskia (1996) *Losing Control: Sovereignty in an Age of Globalization*, Colombia  
U.P.

Sorman, Guy (1994) *Le Capital, Suite et Fins*, Fayard (秋田康男訳『「原理主義」台  
頭の時代』新潮社, 1995 年)

Tambiah, Stanley J. (1992) “Ethnonationalism: Politics and Culture” (岡本真佐子訳  
「エスノナショナリズムー政治と文化」『思想』No.823, 1993 年 1 月)

Weber, Max (1978) *Economy and Society Vol.2*, edited by G.Roth and C.Wittich, Califor-  
nia U.P.

井上他編 (1996)『岩波講座 現代社会学 24 民族・国家・エスニシティ』, 岩波  
書店。

大澤真幸 (1996)「ネーションとエスニシティ」, 井上他編 (1996)所収。

姜尚中 (1994)「世界システムのなかの民族とエスニシティ」, 『岩波講座 社会科  
学の方法 XI グローバル・ネットワーク』, 岩波書店。

----- (1996)「脱オリエンタリズムの思考」酒井直樹, ブレッド・ド・バリー,  
伊豫谷登士翁『ナショナルリティの脱構築』柏書房, 1996 年。

----- (1997)「ナショナリズムの逆襲」, 『大航海』, no.15。

酒井直樹 (1996)「序論 ナショナルリティと母(国)語の政治」酒井ほか編, 前掲

書所収。

清水幾太郎 (1950)『愛国心』，岩波新書。

富山一郎 (1995)『戦場の記憶』，日本経済評論社。

長野豊 (1996)「『国民』を語る文体」 酒井直樹ほか編，前掲書所収。

原田太津男 (1997)「東アジア地域主義の政治経済学」『国際関係学部紀要』19号。

----- (1996)「B. アンダーソンのナショナリズム論再考 (上)」『国際研究』

13号。

本山美彦 (1981)「古典派経済学への回帰」，小野一一郎編『南北問題の経済学』同

文館，所収。

E. ルナンほか (1997)『国民とは何か』，インスクリプト。